疲労の語り／語りの疲労
── ブランショ「終わりなき対話」から

郷原　佳以

「僕はとても疲れているんだ。僕が言うかもしれないことにあまり注意を払わないでくれ。疲労が僕に話をさせているのだから。」（ＸＶＩ）

対話の相手が疲れている場合には、相手の言うことを少し加減して聞くのが普通だろう。現在の彼＝彼女は、思考が明晰である時の彼＝彼女とは違うのだ、と考えるからである。そして、言われた言葉の責任を、完全には彼=彼女に負わせないようにする。そこで語っているのは、真の彼＝彼女なのではないということなのだ。ではそこで語っているのは何なのか。疲れているにもかかわらず語りつづけるとはどういうことか。語りつづける彼＝彼女は、それでも本当に疲れているのか。

1 « l'entretien infini » in *NRF*, No.159, 1966 ; in *L'Entretien infini*, Gallimard, 1969, pp.IX-XXVI 以下、引用では後者でのページ数を記す。

「終わりなき対話」

＜彼＞はある男の部屋に招かれた。男は＜彼＞の友人であり、＜彼＞と話をするために、手紙や電話で何度も＜彼＞を呼んだ。それほどまでして＜彼＞に来てほしかったということは、この男は、よほど＜彼＞と話したいことがあったのだろう。

モーリス・ブランショが1966年にNRF誌に掲載した断章形式のテクスト「終わりなき対話」[1]は、この二人の人物が対話をする情景を描いている。ブランショは、三年後の1969年に数多くの論文をまとめて出版する際、このテクストを巻頭に収め、さらに「終わりなき対話」という表題をそのまま書名として採用した。このことから、このテクストが、『終わりなき対話』全体に通底する「対話」という概念を象徴的に表すものであると考えることができるだろう。このテクストは、『終わりなき対話』に収められた他のテクストが、形式は様々であれ評論と呼べるものであるのに対し、唯一「虚構作品」として分類できる点において例外的な位置を占めている。そのためか、標題も付されておらず、巻末の目次にも含まれていない。正規のページ数を付されておらず、直前に置かれた「注記」と共に、前書きのような扱いである。しかし、短いとはいえ十八頁に及ぶこのテクストは、『私の死の瞬間』（1994）以前では最後に書かれたレシ[2]と考えられ、けっして無視することはできない。以下ではこのレシにより、＜彼＞が友人の部屋に着いてからの二人の対話をみていくが、どちらも＜彼＞であるため、便宜上、招かれた方をH1、招いた方をH2と呼ぶことにする。しかしながら、どちらも＜彼＞という呼び方しかなされていないのは、二人が明確に区別しえないことを表してもいる。実際、レシを読んでいくうちに、どちらの＜彼＞が問題になっているのか、対話の言葉がどちらの＜彼＞によって言われているのか、必ずしも確実ではなくなってくる。そのような箇所では、

2ブランショは虚構作品においてロマンとレシを区別している。形式の上からは、ロマンは、登場人物が多く物語性のある長篇、レシは、登場人物が少なく、描かれるエピソードも少ない短篇と定義することができる。『私の死の瞬間』(1994)以前の段階では、『待機·忘却』（1962）を最後の「虚構作品」とみなされることが多いが、ロジェ・ラポルトも指摘しているように、正確には、本稿で取り上げる「終わりなき対話」（1966）である。（cf. Roger Laporte « Une passion »in *Deux lectures de Maurice Blanchot*, fata morgana, 1975, p.145)

筆者の解釈で進めることにする。

なぜ疲れているのか？＝何があったのか？

Ｈ２はＨ１とよほど話したいことがあったのだろう、と先程述べた。実際Ｈ２は、「あなたに何か言いたいことがあったのです」(X)と言う。しかし、自分の考えをうまく言い表せないような気がするという。それはなぜか。H2の言うところでは、「とても疲れている感じがする」(X)からである。「何か」について話し合うつもりでH1を呼んだのに、呼びかけた後で、何らかの原因によって「疲労」に襲われたというのだろうか。そうではない。実は、H1を呼んだ時には、Ｈ２はすでに「疲労」の中にあったのだ。むしろ、その「疲労」によってこそH1を招いたのだ。なぜなら、「その疲労が対話をすらすら運ばせてくれるだろうと思えた」(X)からである。冒頭で確認したところからすると奇妙だが、H2は、「疲労」によって「語ること」が可能になると言うのである。しかし、H2は、次のことに今になって気づいた、と言う。それは、「疲労が可能にするものを、疲労は困難にする」(X)ということ、つまり、疲れているために、「語ること」 ── 疲労によって可能となったこと ── が難しい、ということだ。このことは、「疲労」によって語ることの奇妙さに比べると、当然のことであるかに思える。どうやら、ここで言われている「語り」というものの特異性について、考えなければならないようだ。つまりその「語り」は、「疲労」のうえに保たれる「語り」だということである。しかしその「疲労」とは何か。なぜそれほど「疲れている」のか。

Ｈ２と同じように、あるいは実はそれ以上にH1も「疲れている」のだが、その共通性については後に触れることとし、ここでは「疲労」の原因について考えたい。しかしそもそもこの「疲労」に原因と呼べるものがあるのだろうか。二人はいつから疲れているのだろう。もしかしたら初めから疲れているのかもしれない。しかし「初め」とはいつのことか。少なくともこの対話以前ではあろう。しかし、このレシの冒頭で、H1は、H2の姿を見た時に次のように感じたのではなかったか。「対話はずっと前から始まっている」(IX)と。対話以前というものがあるのかどうかさえ怪しくなってくる。

しかしやはり、対話以前に「何か」があったのだ。少なくとも二人はそう考えている。その「何か」について語るために二人は共にいるのである。冒頭の断章で一人が、「そういう出来事をこそ、今日僕らは喚起しようと心に決めたのだ。」(IX)と言うのだから。二人がその「出来事」について語り始めるところをみてみよう。H2は言う。「あれ[cela]がいつ起こったのか明確にできればと思うのだが。あのこと[la chose]の特徴の一つが、明確にすることを困難にするのでなければ。僕はあのこと[y]を思わずにはいられない。」(XIII)指示代名詞や人称代名詞によって暗示されるのみの「あのこと」が、「疲労」の原因でもある「出来事」であることは確かであろう。H2を助けようと、H1は応じる。「それは、あなたの上に起こった何かなんですね。」(XIII)ところが、H2は突如、確信をもって言う。「何も起こらなかったんだ」、続けて、「僕には何も起こらなかったんだ」(XIII)と。ここでは、「僕には」というこの限定が重要である。確認しておくと、H2はとても「疲れている」のだが、その「疲労」の原因となった「出来事」は、「彼に」起

こった何ごとかではない。対話がさらに進んだところで、H1は問う。「しかし、何が起こったのか。」(XIV)H2の答えは、「僕に関係のない何ごとかだ」である。「僕に起こったのではない」を「僕に関係のない」と言い換えている。こう言われたH1の反応はどうだろうか。H2ではなく自分に関係がある何ごとかなのだろうか、と考える。しかし、H2はその考えを否定する。「それ」は、二人のどちらにも[ni l'un ni l'autre]関係がなく、誰にも[personne]関係がない、さらには、自らにも関係がない何ごとかだ、と言うのである(XIV)。

「何が起こったのか」。この問いは、このレシに限らず、ブランショのレシの中で私たちが度々出会う問いである。とりわけ、『望まれた時に』(1951)、『私についてこなかった者』(1953)において、語り手はしばしば、「本当のところ[au juste]何が起こったのか」という問いを繰り返す。また、『白日の狂気』(1949、1973)の語り手は、「<本当のところ>何が起きたのか我々に語ってくれ」と頼まれる[3]。さらにこの問いは、私たち読者の抱く問いでもある。たとえば『最後の人』(1957)の読み手は、<最後の人>をこれほど弱く不幸にしたという「出来事」、それ以前に戻ることは不可能だと言われている「出来事」とは何なのだろう、と問いたくなるだろう。本稿ではそれぞれのレシについて細かくみることはできないが、どのレシにおいても、語り手は、レシ以前に起こったであろう「何か」について正確なところを知らず、時には、それが起こったのかどうかにも確信がもてない。『私についてこなかった者』においては、「出来事」は、かつて起こったであろう、語り手と<彼>との出会いに関連しているようなのだが、この出会いに対する<彼>の「危険なほどの無関心」[4]が語られている。そして、その「出来事」が何であったのかを知ろうとする語り手の問いかけは、つねに虚しい問いかけとなる。ただ、『望まれた時に』においては、語り手と対話をする女性クローディアが、「ここでは誰も、何らかの物語=歴史[histoire]に結びつくことを望まない」[5]と言った時に、語り手は、この言葉がある意味で、自分の虚しい問いかけに対する答えとなっていると感じる。

「私」に起こったのではなく、「誰」に起こったということもできないある過去のカタストロフ、その後に残った者は「疲労」を抱え込んでいる。この「何か」に対し、アウシュヴィッツの名に代表される世界大戦下の状況を想起するのは自然なことだろう。ブランショが強制収容所の状況について強調したことは、そこでの人間は、人間的な自己同一化の能力を奪われた非人称の者でしかありえず、そこにはもはや「私」と言いうる主体は存在しない、そこで死ぬ者は「私」として死ぬのではない、ということだった[6]。そしてそれは、ブランショが「絶対」と呼ぶ「出来事」でもある[7]。しかし、「何か」に対し、単に「アウシュヴィッツ」の名をあてはめて、ブランショのレシを理解したつもりになることもできない。ここでは展開はしないが、強調してきたように、ブランショのレシにおいては、「何か」についてその本当のところを「知らない」ということが、つねに問題になっている。「知る」[savoir]という動詞は、様々な変化形でブランショのレシに頻出する動詞であるが[8]、たとえば『望まれた時に』の中で、語り手は次のように述べている。「私はすべてを知っていた、そして現在私はおそらくすべてを忘れてしまったのだ、すべてを知っていたというこの恐ろしい確信を除いて。」[9] ヘーゲルの「絶対知」が「内

3 *La folie du jour*, fata morgana, 1973[éd.1986.],p.36（初出：« Un récit ?», *Empédocle*, No.2, 1949）

4 *Celui qui ne m'accompagnait pas*, Gallimard, 1953 : coll.L'Imaginaire, 1995, p.30

5 *Au moment voulu*, Gallimard, 1951,p.108

6 Cf. «Sur un changement d'époque : l'exigence du retour »(1960)in *L'Entretien infini*, *op.cit.*

7 « Guerre et Littérature »(1968) in *L'Amitié*, Gallimard, 1971, p.128

8 デリダは、ブランショの最新のレシ『私の死の瞬間』を論じた講演「滞留」(1995)の中で、「私は知っているのか、それを知っているのか」という表現を取り上げ、注釈を加えている。そこではこの表現が、「おそらく[peut-être]」という語と結びつけられている。Cf. Jacques Derrida, *Demeure*, Galilée, 1998, pp.79-88

9 *Au moment voulu*, *op.cit.*, p.94

在」として確立された後の世界が問題になっているのである。ブランショが問題にしているのはつねにこのことだと言ってもよいだろう。この「後」の世界に到来するものは、バタイユが非－知と呼ぶものであり、ブランショが、その独特な用語法によって「外」と呼ぶものでもある。そしてそれは、先程引いた、『望まれた時に』の中のクローディアの言葉が暗示するように、歴史＝物語の終わりと不可分である。ヘーゲルによって語られた「知」の確立、そして「歴史の終焉」が、第二次世界大戦の終末によってある意味で示されたのだというような認識に対し、ブランショは、「歴史の終焉」という言葉を不用意に用いることを避けようとするかのように、態度を宙吊りにしているが[10]、このレシで、また他のレシにおいても語られる過去の「何ごとか」が、そのようなものを指していることは確かであろう。

10 Cf. «Sur un changement d'époque : l'exigence du retour », *op.cit.*

このことは、このレシの次のような箇所からも読みとれる。「すべてが終わってしまったと思われたその時に、彼がそこから自由になることができないある出来事によって、彼にとってすべてが始まったのだ。」(XVIII)すべてが終わった時に始まったすべてとは、その「終わり」自体である。明らかに大戦後というコンテクストにおいて書かれているレシ『白日の狂気』の中で、語り手は、白日を直視するという経験に先立ち、それを予感してか、独り言を言う。「さあやってくるぞ、終末がくるのだ、何かが到来するのだ、終末が始まるのだ」[11] と。そして、レシの末尾で語り手は、出来事を「物語る」ことの不可能性そのものを語る。このレシの「二重陥入」 ── 末尾から三番目の段落と冒頭部、そして末尾一行が奇妙な形でつながっている ── [12]の構造も、「物語」の不可能性を示すものである。このレシが、初出では「レシ？」という題名であったのも、出来事を物語るという意味での「物語＝レシ」の可能性が疑われていることを示している。そのような「物語」はもはやない、というのがこのレシで語られていることなのだから。したがって、ブランショの「レシ」には、単に形式的な区別だけではなく、「物語（イストワール）の不可能性としてのレシ」という意味をも担わせなければならない。さて、上に引いた文は、一文を途中で切ったものである。つづきはこうである。「〔彼がそこから自由になれなかったのは〕彼がそれをたえず考えていなければならなかったからとか、覚えていなければならなかったからというわけではなく、その出来事が彼には関係がなかったからなのだ」。再び、「関係がない」ということが強調される。「関係」のないものに束縛される、というとまるで撞着語法だが、すでにみたように、「出来事」の後の世界では、もはや「私」に到来した、あるいは到来する出来事はなく、到来したとすればそれは誰でもない「ひと[on]」に、なのであるが、しかしながら「私」は「それ」と共に生きているのである。

11 *La folie du jour*, *op.cit.*,p.20

12 'la *double invagination*' Cf. Jacques Derrida, «Survivre »(1979), pp.143-148, « Titre à préciser »(1979), pp.242-246, « La loi du genre »(1979), pp.269-274 in *Parages*, Galilée, 1986

ブランショはこのレシで、「何か」の「無関係」性を繰り返し強調し、この「何か」を実体化することを徹底して避けようとする。ある断章では、唐突に次のような文が提示される。「彼に関係のない何かと共に生きる」。そしてその後でこの文が吟味され、少しずつ修正を加えられてゆく。というのも、この文ではまだ、個々の要素 ── ＜生きる＞＜共に＞＜何か＞＜彼＞ ── が目立ってしまい、状況が限定されてしまうというのである。吟味の後に残った文は、「関係のないそれ（と共に）生きる」である。ある意味でナンセンスとも思われる身振りだが、ブランショは、「根本的な時代の変化」を経た後の世界では、「そ

れ」がいかなる限定にも結びつかないものであることを、このように徹底して示しているのである。このレシの前に収められた「注記」には、ブランショが『終わりなき対話』という書物において、<書物の終わり>を問題にしていることが明確に示されているが、ブランショが<書物>という言葉で表しているのは、近代ヨーロッパが目指してきた統一的な秩序、ヘーゲル的な歴史観が目指す全体性、といったものである。「それ」とは、そのような「世界」が完了し、今や「全体」となった意識が、対象の不在、換言すれば、そのような「世界」の「外」で「存在する」ことに直面するという事態であるということができるだろう。そしてその「後」の世界に生きる「ひと」は「それ」に「関係がない」のである。

対話 ── 二でなく三であること ──

そのような「ひと」が、「後」の世界で「終わりなく」続けているのが、ブランショにおける「対話」である。ここでは、この「対話」と訳される語が、"dialogue" ではなく "entretien" であることに注意する必要がある。"dialogue" は、文字通り<対話>、つまり二人の人物による話し合いを表す語であり、そこから、対立する二つのグループが、何らかの一致や妥協を求めて討論することをも指す。二つの異なるものからより高い何かを生み出そうとする弁証法的な<対話>である。そのような<対話>の基本と考えられるのはプラトンの「対話篇 [dialogique]」であるが、ソクラテス的対話においては、意見の異なる者同士が、対話を通して一つの知に到達しようとする。"dialogue" という語は、ブランショの50年代の論稿においては必ずしも否定的に用いられているわけではない[13]が、特に60年代以降には意識的に、"dialogue" よりも "entretien" という語が用いられるようになる。ただし、50年代にも、カフカの手紙の中の「対話 [dialogue] は悪の手段である」という言葉を取り上げ、対話 [dialogue] は危険そのものであると述べており[14]、また、やはりカフカの小説について次のように述べている。「カフカにおいては、関係の不可能性が、ある新たなコミュニケーションの形式を築いている。(略) これらの会話は、どの瞬間にも対話 [dialogue] ではない」[15]。また、ラカンのテクストに触発されて書かれた「分析のパロール」[16]においては、分析者と被分析者との間の精神分析的対話 [dialogue] のうちに、後に自らが概念化する "entretien" に近いものを見出しているように思われる。60年代以降のテクストの中では、たとえば、対話 [dialogue] は言葉の相互性と平等性に基づいており、ただ二つの「私」だけがその関係を確立しうるのだと述べている[17]。また、「関係がまっすぐで、理想的に対称的でありつづける平面幾何学」[18]が対話 [dialogue] であり、そこには何か本質的なもの、すなわち差異そのものが欠けていると述べている[19]。一方、"entretien" という語は動詞 "entretenir" の名詞形である。この動詞には「(人と) 話す」という意味があり、代名動詞 "s'entretenir" は「会話をする」という意味になるが、本来は、"tenir"「保つ」+ "entre"「あいだに」であるから、「あいだに保つ」あるいは「共に保つ」という意味である。したがって、対話者の「あいだに保たれる」対話が "entretien" であると、ひとまず言うことができる。ところで、60年代以降に際立ってくるのは確かであるにせよ、実はブランショは、「終わりなき対話」よりはるか以前から、この語に注目していたのである。というのも、すでに触れた『私についてこなかった者』(1953) の中で、この語が独

13 Cf. « La parole prophétique »(1957), « La douleur du dialogue »(1956) in *Le livre à venir*, Gallimard, 1959 : coll. folio essais, 1995

14 « Tu peux tuer cet homme »(1954) in *L'Entretien infini*, *op.cit.*,p.272

15 « La douleur du dialogue »(1956), *op.cit.*, p.212

16 « La parole analytique »(1956) in *L'Entretien infini*, *op.cit.*

17 «Une parole plurielle »in *L'Entretien infini, op.cit.*, p.114

18 *Ibid.*, p.115

19 *Ibid.*, p.114

特の仕方で用いられているからである。ここで少々脱線してそれを確認しておくことにする。

タイトルとなっている「私についてこなかった者」とは、おそらく作家である「私」が「相棒[compagnon]」と考えている男であり、このレシは、ある家の中にいる「私」と「彼」との対話[entretien]を中心に進む。しかしこの対話において、「彼」は度々、「私」の言葉の末尾を疑問形で反復するだけとなる。「誰かがいるような気がする。－誰か？ここに？－今しがた誰かが窓から見ていた。－窓から？」[20]といった具合である。そして、今引用した箇所から分かるように、実は三人目の人物がいるのだが、この「誰か」は「私」にしか感じられず(目で見るわけではない)、「彼」には分からないようである。「私」にとっては、「誰か」は、気がつくと窓の外にいたり、目の前のソファに座っていたり、そうかと思うと階段を上って姿を消したりするのだが、「私」は、「誰か」が自分自身に他ならないと認めており、「相棒」には「この＜第三番目の人物＞」[21]のことを秘密にしておこうと決心する。「私」は、自分にはこの人物について三人称で語る権利があると言い[22]、また、自分のことを三人称で語る権利が自分に与えられたとも述べている[23]。この人物は、主体とそのイマージュの通常の関係から逸脱したブランショ的なイマージュ、すなわち、「私」ともはや関係のない「私」のイマージュであるということができるだろう。また、この三人の視線の関係から、『望まれた時に』と同様、このレシもオルフェウス神話と関連があるだろう[24]。しかしここでは＜第三番目の人物＝三人称 [la troisième personne] ＞の存在に注目するにとどめ、"entretien" という語が強調されている箇所をみておこう。「彼」に対して「私」が、「私はしばしば、あなたと対話をする [m'entretenir avec vous] のを奇妙に感じる」と言い、「彼」は、「そうだ、我々は対話をしているのだ[nous nous entretenons]」と答える箇所があり[25]、ここで "s'entretenir" という代名動詞が用いられている。「私」は「彼」のこの返事を聞いてなぜか驚きを感じる。この返事が「ある裂け目」を開いたというのである。そして語り手は、「それはあいだに保たれていた [Cela se tenait entre]」と述べる[26]。そして「私」は再び、ある姿が見えると感じ、次のように語る。「かつてこれほどまでに、私もまた、あいだにいる [je me tenais entre] と感じたことはなかったと思う」[27]。ここでは明らかに、「対話をする」ことが「あいだに保たれている」ことと結びつけられている。そして、「あいだに保たれる」のは「対話」であるだけではなく、対話者のあいだの「中性的な拡がり」[28]であり、「誰か」と呼ばれるイマージュであり、また対話者自身でもある、ということが分かる。ここにみられるのは、対立したものがぶつかり合う二の関係ではなくて三の関係であると言えるだろう。この三とは弁証法的な統合の三ではなく、ブランショ自身が述べているように、統合が消すのではなく力に変えていくところの「二つの間の空虚」[29]である。ブランショ的「対話」においては、対話者は言葉を交わしている限り、この「あいだ」から出ることはない。

三ということから想起されるのは、ブランショのレシには登場人物が三人であるものが多いということである。もちろん、今みてきた『私についてこなかった者』において「誰か」は「私」に他ならないと言われており、「私」と「彼」も明確に切り離せないのだから、「登場人物」という言葉は適切ではないが、少なくとも、「対話」をする二人

20 *Celui qui ne m'accompagnait pas, op.cit.*, p.34

21 *Ibid.*, p.50

22 *Ibid.*, p.49

23 *Ibid.*, p.127

24 Cf. Wang Lun-Yue, «L'image et l'imaginaire chez Maurice Blanchot» in *littérature*, No. 97, 1995

25 *Celui qui ne m'accompagnait pas, op.cit.*, p.88

26 *Ibid.*, p.89

27 *Ibid.*, p.90

28 *Ibid.*, p.89

29 «La pensée et l'exigence de discontinuité»(1963) in *L'Entretien infini, op.cit.*, p.8

の他に＜三人目＞となる「誰か」がいるというのは確かである。『私についてこなかった者』の他に、『望まれた時に』、『最後の人』、『待機・忘却』(1962)がそのようなレシである。『望まれた時に』においては、語り手と対話をするクローディアの他に、二人のどちらをも知らないと宣言するジュディットという女性が登場する。『最後の人』、『待機・忘却』においては、「私」と「彼」の他に「彼女」がいる。ブランショのレシにおいては、しばしば女性名詞で表されるものが擬人化され、"elle"を「それ」と訳すより「彼女」と訳すのが適切と思われることがある。これはまた一考に値する問題なのであるが、「あいだにある」のは「彼女」であるという仮説をたてることができないだろうか。確かに、『私についてこなかった者』の「誰か」は「私」に他ならないのだが、「イマージュ[image]」であり「現前[présence]」であり「姿[figure]」である限りにおいては、「彼女[elle]」である。

「あいだ」に定位することなく位置づけられる「彼女」とは、何を意味しているのだろうか。二つの答え方が考えられる。第一に、二であることが同時に三であることと等しいようなブランショ的「対話」において、二人の「あいだ」に開かれるのは「裂け目」であり、したがって共通項ではなく差異である。「彼女」によって導入されるのは、根源的差異としての性的差異の次元であると考えることができるだろう。第二に、「あいだ」に保たれる「彼女」が暗示しているものは、究極的には「言葉[parole]」であると考えられる。「言葉を保つ[tenir parole]」とは、「約束を守る」という意味の熟語でもあるが、ブランショはこの言葉を表題として、レヴィナスをめぐる対話形式のテクストを書いている。『終わりなき対話』に収められたこのテクストにおいて、「言葉を保つ」ことは、「権力なしに語ること」であるとされている[30]。しかし、より厳密に言えば、ここで保たれる「言葉」は単数形ではありえず、その意味では、「あいだ」にいるのは「彼女たち」なのである。『私についてこなかった者』の語り手は、「恐ろしいが魅惑的」な「彼女たち」のざわめきを感じている。「私がこれらの言葉を聴くと述べても、私と彼女たちとの危険で奇妙な関係を説明することにはならないだろう。私は彼女たちを聴くのだろうか？正確に言えば、聴くのではない。深淵に隠れている彼女たちもまた、聴取を逃れつづけるのだから。しかし彼女たちは、発音されるためにそのような聴取を必要としないのだ。彼女たちは喋らない。彼女たちは内部にいるのではなく、それどころか内奥をもたず、完全に外にいるのだ。そして、彼女たちが指し示すものによって、私はこの、あらゆる言葉の外に入り込む。見たところ内心の言葉よりも秘匿されていて、より内的であるようだ。しかしここ、外は、空虚であり、秘密には深さがなく、反復されるのは反復の空虚さであり、それは喋らないのだが、しかしそれは、つねにすでに言われているのである」[31]。

「あいだ」に保たれる「彼女」が「言葉」、正確には「言葉たち」を暗示していることを指摘したが、レシ「終わりなき対話」に戻るならば、ここでの「疲労[fatigue]」もまた、まさに「あいだ」に保たれる「彼女」ではないだろうか。実際、「疲労」は繰り返し、「彼女」として主語の位置におかれている。したがって、「対話」について考えるためには、再び「疲労」についてみておく必要があるだろう。「疲労」と「言葉」、あるいは「語ること」とはどのようにつながっているのだろうか。

30 «Tenir parole » (1962) in *L'Entretien infini, op.cit*, p.93

31 *Celui qui ne m'accompagnait pas, op.cit.*, pp.135-136

疲労の共有＝友愛（アミティエ）

ブランショのレシには登場人物が三人のものが多いと述べたが、「終わりなき対話」は唯一、登場人物が二人のレシである。しかし、＜三人目＞が明示されてはいないが、あるいはむしろそれだけ一層、この「対話」には三の要素が読み取れる。たとえば、「対話」の始まりについて述べた次の箇所は、この「対話」の性質を端的に表している。「彼らはテーブルを隔てて席を占める。互いに相手の方を向いて座るのではなく、もう一人の人物が、自分が真の話し相手だと考えうるようなかなり大きな間隔を、彼らを隔てるテーブルのまわりにおいて。彼らはそのような人物のために話すのだといえるだろう。彼らがそのような人物に向かって話しかけるとすればだが。」（X）ここではまさに、二人の「あいだ」に存在しうる＜三人目＞が暗示されている。では、このような二人の関係について、「疲労」という観点からみていくことにする。

先に、「疲労が可能にするものを疲労は困難にする」というＨ２の言葉を引用した。繰り返すことになるが、「歴史の終焉」と呼ばれるようなものの「後」の世界の中で、そもそもの初めから「疲れている」「ひと」が続けていくのが「対話」であるが、「疲労」しているために、「対話」そのものが困難となる、ということであった。ここでは、「疲労」がH2だけのものではなく、対話をするために家に招かれたH1もまた同じように、もしかするとH2以上に「疲れている」ことに注目しよう。「疲労」は彼ら二人に共通のものなのである。しかし、共通のものをもっているからといって、それが「疲労」である限り、そのためにより一層二人が近づくということはない。それは、次のようにはっきり述べられている。「彼は疲れている、そして彼を迎えるのも疲労した男だ。彼らに共通の疲労が彼らを近づけることはない。」（X）では、二人の対話者が「疲れている」とは、一体どのような状況なのか。テクストには、次のように書かれている。「二人の疲れた男、つまり、疲れているのではなく、無縁である者達[étrangers]ということだ。二人の疲れた男がちょうどそうであるように。」（XIII）共有する「疲労」によって近づくどころか、そのために二人は「無縁」だというのである。ブランショにおける「あいだ」の特異性とはこのようなものである。つまり、共有される空間であるといっても、それは同時に「中断[interruption]」であり、この「中断」のゆえに、二人は「無縁な者」、言いかえれば「他人」なのである。

そしてしかしながら、この二人の対話者、H1とH2は「友人」である。二人は対話の中で、度々互いの「友愛」を確認するのである。たとえば、H2が招いたのでなかったならばどうして自分が来ただろうか、というH1の言葉に対し、H2は、「友愛があなたを送り出したのかもしれない」(XIII)と答える。H1に対して、「あなたはこれまで一番頼もしい友人だった」(XIV)と言いもする。また、次のような言葉にも述べている。「あなたの友愛がどんなに倦むことを知らず、欲得から離れたものであるか、とても言い尽くせないが、その友愛の理由としては、私の最も特別なものであり私の特権的な分け前であるものしかない。しかし、一人の疲れた男に、ただその疲労ゆえに愛着を覚えるなどということがありうるだろうか。」(XXI) この二人の対話者の「友愛」は確実なものであるようだが、それは相手の「疲労」ゆえの「友愛」であるようだ。そしてこれは、「友情」という語の通常意

味するところとは異なったニュアンスをもつ、また恐らくバタイユにしばしばみられる「友愛」の観念とも異なる、ブランショ的「友愛」なのである。

ブランショは1971年に、主に交流のあった人物について様々な機会に書いたテクストを集め、『友愛』と題して出版している。その最後には、30年代から親しくしていた友人バタイユの死に際して書かれたテクスト、「友愛」(1962) が収められている。また、『終わりなき対話』に収められたバタイユ論「肯定と否定的思考の情熱」[32] (1962) にも「友愛」の語がみられる。もう一つのバタイユ論「思考の賭け」[33] (1963) では、バタイユの「語る力」、「語る時の動き」を、まさに「あいだ」に保たれる「対話」として論じている。そこでは、沈黙のうちに骰子を振って賭けをする二人の賭博者のうちに、「対話」が生じているのだと述べられている。これらのバタイユ論との類似点から、レシ「終わりなき対話」を、バタイユとの「友愛」に基づいて書かれたのだと考えることも可能である。しかし、ブランショは『終わりなき対話』の他のテクストでも「友愛」の語を用いており、また、1996年に発表された『友愛のために』は、1993年にディオニス・マスコロに寄せて書かれたものである。その中では、マスコロだけでなくジャン・ポーランやガストン・ガリマールとの交流についても述べられ、しかも末尾で「私が君と呼び、私を君と呼ぶ」「唯一の友人」[34] と呼ばれているのはレヴィナスである。『終わりなき対話』は、全体として、レヴィナスの思想との深い共鳴において書かれている書物であるが、対話形式のテクストにおいて、対話者にレヴィナスの名を与える必要はないだろう。それと同様に、「友愛」を、ブランショとバタイユとの「友愛」に閉じ込めてしまうこともできない。このことは、デリダのやはり対話形式のテクストの中で、対話者の一人が述べることでもある[35]。デリダのテクストの中で「友愛」の一節が引用されるのは、ブランショのレシに度々みられる「来て」という言葉に関連してのことである[36]が、「終わりなき対話」でも、H2がH1に、「来てくれる」ように頼んだのであった。ブランショの「友愛」においては、つねに呼びかけがなされるにもかかわらず、呼び寄せられて行ったところに実りある会話が交わされるわけでもなく、二人は「無縁な者」でありつづけるのである。しかし二人が「友人」であるのは、語りつづける限りにおいてであるのだ。二人が、その原因である「疲労」について語るのを聞いてみよう。

32 « L'affirmation et la passion de la pensée négative »(1962) in *L'Entretien infini, op.cit.*

33 «Le jeu de la pensée »(1963) in *L'Entretien infini, op.cit.*

34 *Pour l'amitié*, fourbis, 1996, p.35

35 Jacques Derrida, «Pas »(1976) in *Parages, op.cit.*, p.62

36 ブランショは様々なテクストの中で、「君と呼ぶこと[tutoiement]」に独特な意味を与えているように思われるのだが、デリダのテクストの中で対話者の一人は、ブランショのレシにおいて、「あなた」としてではなく「君」として、「来て」と呼びかけられるのは通常女性であると指摘している。必ずしも正確でないこのような指摘をするのは、ブランショにおける「女性性」の問題を示唆するためであろう。Cf. *ibid.*, p.61 「終わりなき対話」では、対話者は「あなた」という呼称を用いる。

「疲労」=「語り」

「疲労が可能にするものを疲労は困難にする」とH2が嘆くのを聞き、H1は次のように問う。「もしあなたが、今そうだと言っているほどには疲れていないとしたら、あなたは僕に何と言うだろう？」(X) 奇妙な問いである。実際疲れているのだとすれば、そのために対話が困難だと言っているのだから、疲れていない時に言うはずのことが分かるはずがない。しかし、この問いを注意深くみてみよう。H1は、「あなたが今そうであるほどには疲れていないとしたら」ではなく、「今そうだと言っているほどには」と尋ねている。ということは、「疲れていると言う」ことと、「本当の疲労」が一致しない可能性があるということだ。したがって実は、H2が本当に疲れているのかどうかは、すでに判然としていない。H2の返事は、ただ問いを繰り返すだけである。「うん、僕はあなたに

何と言うだろう？」(X) この返事は、「ほとんど陽気に」(X) なされる。H1はまた問いを繰り返す。「そう、僕らは何と言うだろう？」(XI) H2は、今にも眠ろうとするかのように頭を下げるのだが、しかし、疲れているというより力強いという印象を与えるという (XI)。少したってH2は、すっかり目覚めた様子で、「僕らは何を言っていたんだっけ？」(XI) と言う。この後H2は、H1の方が自分よりずっと疲れているのではないかと言い出し、それでも自分達はまあまあうまく疲労から抜け出している、と言う (XI)。この場面から言えることは、二人が本当に疲労しているのかどうかは判然としないこと、そして、「言う dire」ということが繰り返し強調されていることである。

「言う」ということ、もはや二人に残されているのはただそのことだけなのではないだろうか。二人の「友愛」について述べながらH1は、「語ることが、我々に残された最後のチャンスだ、語るということが我々のチャンスなのだ」(XVI) と言う。そしてその語りとは、対話が可能にする語り、すなわち、「彼らの心を占める何ごとをも語らないこと」(XVII) である。そしてそれが「疲労の言葉」なのであろう。その「疲労」とは、次のように言われているものである。「疲労が言葉をより不正確にし、思考をより雄弁でないものとし、伝達をより困難にするものだと仮定しよう。これらの特徴全てによって、この状態に固有の不正確さが一種の的確さに到達しないだろうか。その的確さは、伝達しないでおくべき何かを提出することによって、結局はまた正確な言葉に奉仕するような的確さなのである。」(XXI)

しかし、それにもかかわらず、「疲労」をこのようにある仕方で定義してしまうことは、「疲労」と食い違うことになるのだ。テクストの後半部になって、「お前」と呼びかけてくる高圧的な声が登場するのはそのためである。それはまずは、「彼の疲労」(XX) の声なのである。「お前はそれほど疲れていない。真の疲労がお前を待ちかまえている。今、そうだ、お前は疲れ始める、お前はお前の疲労を忘れ始める、罪も犯していないのに、こんなに疲れてしまうということがありうるだろうか。」(XX) そして、この「疲労」の声が始まったところから、二人の対話者の言葉は徐々に消えてゆき、対話は、この高圧的な声と、「私」と言う者 (H1が「私」と語り出したのだと考えることができるだろう) との対話となる。突然登場するこの声は、『白日の狂気』において「彼女」と擬人化される「法」の声を想起させる[37]のだが、ここでの声もやはり、「番人」(XXV) と言われているように、「法」の声である。「疲労」について考えをめぐらす「私」を裁く声なのだ。「疲労」をめぐる思考とは、たとえば、「疲労」を「中性的なもの [le neutre]」と結びつける思考である。「疲労は、不幸のうちで最も謙虚な不幸、中性的なもののうちで最も中性的なものである」(XXI) というように。「法」の声は、このような思考は対象を取り逃がすだけだと言う。声は、尋問する。「お前は、疲労によって中性的なものに、中性的なものによって疲労に近づけると本当に信じているのか。(略) 語ることは見ることではないのに。」(XXII) 「語ることは見ることではない」、これは、この同じ書物に収められた対話形式のテクストの表題でもあり[38]、『終わりなき対話』におけるブランショの一貫した姿勢を表す言葉である。簡潔に言うならば、西欧の伝統において、「光」の保証のもとで「見ること」が、人間の事物への接近を可能にするとされ、視覚に法外な特権が与えられ

37『白日の狂気』における「法」は、初めは「お前」と呼びかけ、途中からは「あなた」と呼びかけるようになる。

38 «Parler, ce n'est pas voir »(1960) in *L'Entretien infini, op.cit.*

てきた。「見ること」は、対象に距離をもって、しかしその距離によって直接的に対象を捉えることである。ブランショによれば、この距離は、「測られた、測りうる」[39]分離であるにすぎず、「見ること」は、連続性の経験をすること、さらには、<一者>を祝福することである[40]。ブランショは、このような視覚に対して、悟性[entendement]や理解[entente]につながる「聞くこと」を称揚するのではない。視覚の支配から思考を解放するのは、「語ること」なのである[41]。したがって、「語ることは見ることではない」、と「法」としての「疲労」の言葉は言う。つまり、「語ること」によって、何らかの対象が現れるのでも隠れるのでもないということだ。しかし、「私」はそのことを分かっていないわけではない。それどころか、「語ること」のそうした性質を「すべて知っている」(XXV)のである。「語ること」の矛盾についてもよく分かっている。それは、パロールを途切れさせるような「疲労」について、「中断」について語るということによって、そのような「疲労」、「中断」ではない何ものかが復元されてしまうという矛盾である。先にみた奇妙な言葉、「関係のないそれ(と共に) 生きる」も、そのような矛盾を最大限避けようとして出てきた言葉であった。「法」の言葉は、言説が「中断」を「生み出してしまう」ことにどのように対処するのかを問うのだが、「私」の最終的な答えは、「私はそれについて語らないと言う」(XXV) である。何ものかを現前させてしまうという言説の危険性を知りながらも、それについては語らない、と「言う」。この「言う [dire]」ということこそ、先に述べたように、本稿でみてきた対話者に残されていた唯一のチャンスだったのである。「対話」とは、言説を越えたところで、「言う」ということなのではないだろうか。この「言う」ということには対象が欠けている。したがって、「対話」によって真の「疲労」が示されるなどということはなく、対話者が本当に疲労しているかどうかは実は問題ではないのである。ある意味で、「疲労」は対象なき「語り」の中で生じてくるものであり、「疲労」と「語り」とはもはや区別のつかないものなのである。「対話」において、「あいだ」を共有し、自らも「あいだに保たれている」存在である対話者は、「対話」を続ける限りつねに、「自分の外側にある言語の中に巻き込まれている」(XIX) のである。けっして言語の外に出ることなく、言語のうちで、無際限に言葉を反復し続けること、それが、有限の中の無限、ブランショ的「終わりのなさ [infini]」である。

39 *Ibid.*, p.39

40 *Ibid.*

41 本稿ではエクリチュールの問題には触れないが、ブランショにおいて、このような意味での「語ること」は「書くこと」と異なるものではない。